

を確立。右側左房切開から、僧帽弁後尖の切除・縫合による僧帽弁形成術を施行した。術後経過に問題はなかったが、疣贅内に活動性の細菌を認めため、抗生剤加療後に退院した。当科における右小開胸心臓手術第1例目であり、若干の考察を加え報告する。

8 一期的修復術を施行した Fallot 四徴症・肺動脈閉鎖・主要体肺動脈側副動脈 (TOF/PA/MAPCA) の1例

大久保由華・渡邊 マヤ・白石 修一
高橋 昌・土田 正則

新潟大学大学院 呼吸循環外科学分野

症例 4歳7ヶ月の男児。出生後より Fallot 四徴症・肺動脈閉鎖と診断された。1歳時に SpO₂ 75%程度であり、心臓カテーテル検査施行。PA index 292と肺血流も良好であり外来にて経過見られていた。体重増加を待ち、4歳時に手術目的に再びカテーテル検査施行した。PA index 202と肺動脈全体的に低形成であり MAPCA が疑われ、造影 CTにて存在が明らかとなった。そのため Unifocalization 及び心内修復術を一期的に施行し良好な結果を得られたので報告する。

9 直接縫合閉鎖術で救命し得た肝後面下大静脈損傷の1例

升井 大介・飯沼 泰史・平山 裕
飯田 久貴・内藤 真一・新田 幸壽
大谷 哲也*・横山 直行*

新潟市民病院 小児外科
同 消化器外科*

症例は3歳の女児。自宅前で車に巻き込まれショック状態となり、紹介医搬送された。同院で肝損傷と診断され当院へ転送された。

来院時、腹部膨満を認め、循環虚脱を認めた。CTで大量の腹腔内出血、肝右葉の造影不良と右肝動脈の extravasation を認め緊急手術を行った。

開腹すると肝右葉後区域が完全に断裂しており、その奥の肝後面下大静脈に約2cmの損傷を認めた。下大静脈を圧迫しつつこれを直接縫合し、肝後区域切除を行った(術中出血3,500ml)。

術後は超音波検査で下大静脈に狭窄を認め、一時的に下半身を中心とした浮腫、乏尿を認めたが、保存的加療で軽快した。その後経過良好で25病日に退院した。現在術後6か月で経過良好であるが、術後の問題点も含め、文献的考察を加え報告する。

10 過去40年間における食道閉鎖症62例の臨床的検討

佐藤佳奈子・窪田 正幸・奥山 直樹
小林久美子・仲谷 健吾・荒井 勇樹
大山 俊之

新潟大学大学院 小児外科学分野

1971年1月から2012年5月までの40年間に当院で食道閉鎖症にて手術を施行した新生児62症例について経年的臨床像の変化につき検討した。男:女=33:29。生存43例、死亡19例(生存率:69%)。Gross分類:A型6例(10%)、C型55例(89%)、E型1例(1%)。平均出生体重は2,498g(808~3,590g)在胎週数は37.8週(33.1~44.0週)であった。

在胎週数、出生体重、母の年齢、出生前診断、同胞数、合併奇形、生存率、手術術式、死亡症例の死因・死亡時期について前半20年(前期群 n=38)と後半20年(後期群 n=24)の2群に分け診療録をもとに後方視的に比較、検討した。